

眠れる獅子（睡獅）と梁啓超

石川 禎 浩

序 言 ― 發 端

梁啓超研究に缺かすことのできない『梁啓超年譜長編』（丁文江・趙豐田編、上海人民出版社、一九八三年）は、二〇〇四年にその日本語譯が刊行された。日本語版『梁啓超年譜長編』^①は、漢語版原書の校訂を経た的確な譯と豊富な譯注をもって大きな特徴とする。十年の歳月を費やして作成された膨大な量の譯注（總計で三九四〇項目）は、同じく日本語版に付された人名索引および別名一覽表と相まって、この書の利用價值を格段に高めたと言える。筆者はこの翻譯作業にたずさわり、いくつかの譯注を分擔作成したが、どうしても解決できない難問が最終的にいくつか残った。戊戌の年（一八九八年）に梁啓超が北京で行った保國會での演説は、その最大のものの一つである。

保國會とは、變法運動の一環として、改革に心を寄せる人士を糾合して結成された團體である。梁啓超は、一八九八年四月二一日（閏三月初一日）に開催された保國會の二回目の會合で演説に立ち、中國士大夫の奮起を促して次のように述べ

ている。

ああ、かつて曾惠敏（曾紀澤）は「中國先睡後醒論」を著し、イギリス人のウルズリ（英國の子爵、現陸軍總司令官）は、「中國はフランケンシュタインの如き怪物であって、大の字で寝ている時は安逸無爲だが、いったん目を覺ますと牙をむき爪をとぐ」と言いました。どちらの場合も、わが中國にはまだ十分望みがあると見ているのです。（日本語版第一卷、一九六頁）

【原文】嗟乎、昔曾惠敏作「中國先睡後醒論」、英人烏理西（英之子爵、今任全國陸軍總帥）謂中國如佛蘭金仙之怪物、縱之臥則安寢無爲、警之覺則奮牙張爪、蓋皆於吾中國有餘望也。^②

「烏理西」がウルズリ（Wolseley）のことであり、「佛蘭金仙」がフランケンシュタイン（Frankenstein）のことだということにさえ気がつけば——むろんこうした謎解きをするには、それなりに苦勞があるわけだが——梁の演説のこの一段を翻譯するのはさして難しいことではない。問題は譯注である。日本語版は、この段の「曾惠敏」（すなわち曾紀澤）、「ウルズリ」、「フランケンシュタイン」の三カ所に注釋をつけたが、それらは次のようなものである。

【曾紀澤】（一八三九—一八九〇）、字は劼剛、湖南省湘鄉の人。曾國藩の長子。近代中國の初期外交家として知られる。歐洲在勤後の一八八七年一月に、「中國先睡後醒論」（原題 China, the Sleep and the Awakening）をロンドンの『アジアティック・クォーターリーレビュー』（*Asiatic Quarterly Review*）に英文で發表、中國の現役外交官の政論として廣く注目

された。その後、顔詠經口譯、袁竹一筆述の漢譯が『皇朝蓄英文編』一に收められた。同論文は北洋海軍建設など軍備の近代化を中國覺醒の根據に挙げ、強兵を富國に優先させ、外交の充實を國勢強化の急務とする主張を展開したが、後に、變法論の立場を取る何啓、胡禮垣から「曾論書後」〔『新政眞詮』〕により、痛烈にその不十分さを指摘された。

【ウルズリ】(Garnet Joseph Wolseley 一八三三—一九二三) イギリスの軍人。一八五七年に軍務のため初めて來華、第二次アヘン戦争に従軍、戦争後は清朝を援助して太平天國軍を鎮壓するよう主張した。その後、英領アフリカ植民地で軍政の要職を歴任した後、一八九四年には陸軍元帥に昇任、翌年にはイギリス陸軍總司令に就任した。中國での體驗をまとめた著書としては、*Narrative of the War with China in 1860*, Longman, 1862 がある。

【フランケンシュタイン】(原文 佛蘭金仙之怪物) は、イギリスのメアリ・シェリー (Mary Shelley) の怪奇小説に登場する人造人間 (Frankenstein) のこと。その小説が出版され話題を呼んだのは一八一八年のことだから、ウルズリが中國をそれに譬えても不思議ではない。梁啓超がいかなる経緯でウルズリの言及について聞知したのかは不明だが、一八九九年に発表した「自由書 動物談」〔『專集』二、四三—四四頁〕では、「佛蘭金仙」なる人造人間が大英博物館に眠ると述べ、かつて曾紀澤がそれを「睡獅」、あるいは「先睡後醒之巨物」と呼んだことがあると記している。ただし、先の「中國先睡後醒論」をはじめとする曾紀澤の文章には、これに関連する言及は見當たらない。^③ (引用文の傍線は石川による、以下同じ)

この段の譯注を作成した筆者にとって、もっとも頭を悩ませたのは、特に三つ目のフランケンシュタインの怪物である。

小説『フランケンシュタイン』(*Frankenstein: or the Modern Prometheus*)がイギリス人シェリーによって書かれたことなどを辭書項目のように説明することは、決して難しくはない。問題は、ウルズリのフランケンシュタインに關する言及を梁啓超が如何なる經緯で知るに至ったかである。また、上記の注のように、梁啓超は翌一八九九年に發表した別の文章(『自由書 動物談』)では、類似の内容を紹介しながら、それを曾紀澤の言論活動(『中國先睡後醒論』を含む)とより強く結びつけるだけでなく、フランケンシュタインの怪物と「睡獅」とを同じものだと述べている。⁴さらに調べてみると、近代中國の象徴的表現として我々になじみの「睡獅(眠れる獅子)」という表現(字句)は、梁啓超の一八九九年のこの文章を嚆矢とするらしいことがおぼろげながらわかってきた。つまりは、「睡獅」と曾紀澤、ウルズリ、フランケンシュタインの怪物とは、密接な關係があるらしいのである。

だが、當時わかったのはそこまでで、筆者は結局その脈絡や經緯を突き止めることができなかった。すなわち、譯注に記したとおり、「梁啓超がいかなる經緯でウルズリの言及について聞知したのかは不明」と表白する一方、曾紀澤の文章には、「睡獅」やフランケンシュタインの怪物に「關連する言及は見當たらぬ」と述べるに止まったのである。日本語版の譯注は、ありきたりの事項に通じ一遍の説明を付けるのではなく、一筋縄では行かないかかる事項に對して、専門の研究に資する情報を提供することを目指すものであった。したがって、「くについては未詳(不明)」と述べざるを得なかった筆者は、これを一種の屈辱と考え、爾來これに何らかの解答を與えることを目指してきたのである。

他方この數年の間に、外的要因としては中國の國際的地位の上昇があり、また内的要因としては歴史學研究における象徴(シンボル)研究の進展があいまって、いわゆる「睡獅」言説の來歴をめぐる議論が活發に展開されるという事態が生じた。その代表的な研究は、フィッツジェラルド氏(John Fitzgerald)と單正平氏のもの、そしてそれを踏まえて書かれた楊瑞松氏の論文である。⁵

フィッツジェラルド氏の研究は、近代中國にまつわる「沈睡」「覺醒」の言説を総合的に分析したもので、「睡獅」説そのものの生成には觸れていないが、「眠れる中國」を語る場合に常に引き合いにされるナポレオンの言葉について、興味深い指摘をしている。すなわち、氏は「中國が目ざめる時、世界は震撼する」という良く知られたこの言葉をセントヘレナ島のナポレオンの口から出たものとする説がまったくの俗説であることを力説して、おおよそ次のように言うのである。

ナポレオンが中國の覺醒について語ったというのは、全くの誤傳であり、その言葉がナポレオンの口から出たことを證明するいかなるフランス語の文字資料もない。それをナポレオンの功に歸すことは、清末の官僚たち（曾紀澤らを指す——引用者注）の著作権を侵害することにはかならない。實際は、まさにかれらこそが、一九世紀の末に、最も早く、世界に對して中國の興起に目を向けるよう促したのである。^⑥

つまり、眠れる中國の覺醒ということを一九世紀末にハッキリと廣言したのは、中國の知識人たちであって、具體的に言えば、曾紀澤の「中國先睡後醒論」あたりがそのはしりであると力説するのである。

一方、單正平氏は、大著の一章節をまるまる「睡獅」言説の發生過程に關する分析に割き、多くの資料を涉獵した結論として、曾紀澤と梁啓超の役割を強調する。そして、「睡獅」にまつわる言説が先に紹介した梁の「自由書 動物談」（一八九九年）に起源すると述べた上で、次のような推定をしている。

「醒獅」説の發生過程は、恐らく次のようなものであろう。すなわち、曾紀澤が博物館の怪物を睡獅と命名し（一應そういうものがあると信じた）、あわせて詩文の中で獅子の特徴やその東西文化における象徴的意味について言及↓イギリス

人がフランケンシュタインの名を日本人に傳えた(?)↓梁啓超が日本の新聞雑誌を通じてこの言い方を知った↓梁啓超が「動物談」を執筆↓黄遵憲や鄒容らが續いてそれを援用した、と。ただし、これはあくまでも推測にすぎず、なお實際の根據を缺いている。^⑦

單氏の研究が、廣範な資料をもとにした高水準のものであることは間違いないのだが、氏自身も認めるように、未だ決定的な證據を缺く憾みがある。一言以て言えば、隔靴搔痒であり、なお検討の餘地が残っていると云えよう。

他方、楊瑞松氏の研究は、單氏の研究よりもさらに多くの用例を探し出し、紙幅の多くをその「國族符號」としての意味の分析に割いている。また、梁啓超の提起した「睡獅」の言説が、その後日本における「中國＝眠れる獅子」言説にも影響を與えている可能性があるということを指摘している點で注目し値する(後述)。ただし、中國での「睡獅」説誕生のいきさつ(例えば、それがフランケンシュタインの怪物と關わっていることの謎)自體については、單氏のそれと同じ水準の分析に止まっているため、前述の『梁啓超年譜長編』の譯注の疑問を解消してくれないという點では、フィッツジェラルド氏、單正平氏のそれと同様の不滿が残る。

近年における中國の政治的、經濟的崛起に伴い、またオリンピック開催に伴う愛國主義的うねりの高まりに伴い、「睡獅」説は、近ごろ中國でまた高唱されるに至っている。つまり、近百年の屈辱を雪ぐことの象徴として「睡獅」「醒獅」が盛んに唱えられているわけだが、筆者もその雪辱の聲にならう、譯注作成時の屈辱をこの機會に雪ぎたい。

一 梁啓超の知識の來源

先に紹介した單氏、楊氏の研究は、中國「睡獅」説の形成について、疑いなく多くの知見を提供するものだが、なおいくつかの疑問點が残る。すなわち、① 梁啓超のフランケンシュタイン（あるいは曾紀澤「中國先睡後醒論」）への言及について、一八九九年に發表した「自由書 動物談」^⑧を初出とし、日本からの影響を示唆するが、本稿の序言でも述べたように、これらのフランケンシュタイン、曾紀澤への言及は、來日以前の一八九八年四月二日に行われた保國會での演説に遡るということ、② 曾紀澤の文集（含「中國先睡後醒論」）には、「睡獅」「フランケンシュタイン」の語が見えないということ、③ 同様に、ウルズリの著作にも、中國を「睡獅」「フランケンシュタイン」に喩える言葉は見えないこと、の三點である。

これら三つの疑問點を解く鍵は、ひとえに①の保國會での演説内容の情報源にあると言ってよからう。ちなみに、保國會で演説をした當時、梁啓超はわずか二五歳であった。幼少より俊英の譽れ高かったかれではあるが、長年科擧の勉強に打ち込んできた當時の士大夫の常として、かれとて海外の事情に特に通じていたわけではない。かれが上海の書店でたまに『瀛環志略』なる地理書を購ひ、「初めて五大洲に各國のあることを知った」^⑨のは、戊戌の年のつい數年前にすぎない。

そんなかれが、ウルズリや「フランケンシュタインの怪物」を紹介できたのは、實は演説の少し前に、『國聞報』なる日刊紙（一八九八年三月三日）に掲載された一文を読んだからだった。『國聞報』は、當時天津で發行されていた變法派寄りの新聞で、その一文とは、王學廉なる人物の翻譯した「如後患何」（後患を如何せん）という評論（イギリスの『國運報』の正月一日號から譯したとある）とそれに付された嚴復の按語である。^⑩「按語」をつけた嚴復は、當時の『國聞報』の主編者であり、その譯著『天演論』をはじめとして、中國近代の西學第一人者であることは改めて説明するまでもなからう。

『國聞報』に掲載された「如後患何」は、中國の覺醒の可能性とその潜在的脅威について述べたものだったが、その中に

は次のような記述と按語がある。

わが英國の現任の陸軍大元帥の某氏は、かつて數年前に中國のことを次のように論じている。中國には四億の民がいるが、かりにその中にナポレオンのごとき人物があらわれ、その才能を發揮して君主となり、その指揮のもとで國を刷新するならば、數年の後にはヨーロッパ人は東アジアから驅逐されるだけでなく、西洋人はかれらに壓迫されてしまふことだろう、と。(嚴復の按語…いわゆる現任の大元帥とは、恐らくウルズリ子爵のことであろう。かれは平素より中國があなどれないということを持論としている。)

眠れる中國は、フランケンシュタインの怪物となるであろう。この怪物は、寝ている時には安逸無爲だが、ひとたび目を覺ませば、牙をむいて大暴れし、人に危害を加えるのだ。(嚴復の按語…フランケンシュタインの怪物というのは、傀儡^マのことで、英國の女流作家シェリーの小説に出てくる。骨や皮、筋をつなぎ合わせて人にしたもので、仕掛けを動かすと、大暴れして人を殺したりし、手がつけられないが、寝ている時には至って大人しい。論者がこれを中國に喩えているのは、我々の潜在力が大きいと言っているわけである。つまり、西洋人が世界に雄を稱していられるのは、ひとえに我々がまだ眠っていて、目覺めていないからに過ぎないということである。)^①

この翻譯記事に見えるウルズリやフランケンシュタインの怪物についての記述を、保國會での梁啓超の演説と對照するならば、梁がこの記事の内容を演説でそのまま援用していることは、一目瞭然である。もっとも、もとの翻譯記事では、ウルズリの主張とフランケンシュタインの怪物の喩えは、別個のことがらなのだが、梁啓超の演説では、ウルズリが中國

をフランケンシュタインの怪物に喩えているという具合に、一緒にたにされている。梁啓超が適當にすぎ合わせたのであろう。他方、嚴復の按語は、さすがに當時の西學の第一人者だけあって、かれがウルズリの平素の主張から小説『フランケンシュタイン』の著者や内容に至るまで、かなり正確に理解していたことをうかがわせる。かれ自身『フランケンシュタイン』を読んだことがあったのかも知れないし、あるいは天津の知り合いの外國人に教えてもらったのかも知れない。もっとも、フランケンシュタインの怪物については、造物主に復讐をする怪物という隱喩についてはともかく、その形状やイメージについては、どんなに頑張っても中國の讀者に伝えるのは至難のことであつたから、この按語を読んだ梁啓超ら讀者がいったいどのような怪物を想像したかは、全くわからない。唯一確實に言えるのは、梁啓超らの思い描いた怪物は、我々が現在イメージするグロテスクな化け物とは、相當に違うものだっただろうということ（これについては後述する）、そしてかれの理解した怪物は、眠れる中國の覺醒と重ね合わせられるという意味において、プラスの意味を持つものだったらしいということである。

梁啓超にしてからが、このように受け賣りで口にしたものだったわけだから、保國會の會合で、「佛蘭金仙之怪物」という珍妙な言葉を耳にした聴衆たちは、恐らくその音のつながりが何を意味するのかさえ、皆目わからなかったであろう。一方、その演説で「佛蘭金仙之怪物」と竝んで言及された曾惠敏（曾紀澤）や「中國先睡後醒論」については、士大夫たちは理解できたはずである。ただし、『國聞報』に掲載された翻譯記事や嚴復の按語には、曾紀澤、あるいはかれの著した「中國先睡後醒論」に関連する言及はまったくない。後述するように、曾紀澤の「中國先睡後醒論」は、當時時局に關心を抱く者には、それなりに知られていたから、梁啓超は自らも讀んだことのある曾紀澤の論と『國聞報』の記事とを巧みに組み合わせることによって、保國會に集った變法派の人士に奮起をうながしたのだった。その意味では、保國會での演説は、梁の宣傳家としての才能が存分に發揮されたものと言ってよいだろう。

二 「睡獅」の登場

周知のように、戊戌變法は百日ほどで失敗に終わり、梁啓超は一八九八年秋に日本へ亡命するわけだが、その亡命を挟んで、かれはさらに二度フランケンシュタイン（睡獅）について言及している。日本亡命後に刊行した雑誌『清議報』に掲載された「自由書 動物談」（一八九九年四月）と「瓜分危言」（一八九九年五、八月）である。関連する段は、それぞれ次の通りである。

わたしが部屋で横になっていると、隣室で甲乙丙丁の四人が大聲で動物の話をしているのが聞こえてきた。……〔中略〕……丁が言うに、「自分は昔ロンドンに遊んだことがあるが、ロンドン博物館には人造の怪物があった。獅子のような姿だったが、横たわったままで、生きて動くような氣配はなかった。するとある人がわたしにこう語りかけて來た。『こいつを馬鹿にしてはいけないよ。中が機械じかけになっていて、ネジを卷いたらたちどころに暴れ出し、つかみかかったり噛みついたり、千人力でもかなわないんだから』。わたしがその怪物の名を尋ねると、その人は『英語ではフランケンシュタインというが、かつて中國公使の曾紀澤侯がその名を睡獅と譯したことがあり、さらに先睡後醒の巨物と呼んだことがある』と教えてくれた。わたしはそのネジを卷いてみたが、動く前にバネが壊れて自分の手に刺さってしまった。つまり、長らく放ったらかしになっていたから、錆びてしまった上に、何かがはさまってしまっていたわけさ。新しい機械に取り替えないと、このフランケンシュタインは、このまま眠ったままになってしまいうだろうよ。惜しいことだ」ということだった。（『自由書 動物談』『飲冰室合集・專集』二、四三～四四頁）⁽¹⁵⁾

この文章は、梁啓超が又聞きした動物についての逸話を四つ集めて紹介したもので、いずれもその動物に假託して、中國の前途に思いを馳せるという趣向になっている。¹⁴ その四つ目の逸話が、ロンドンの博物館に眠る怪物のもので、ここにフランケンシュタインの怪物が登場するのである。

保國會での演説から一年後に書かれたこの文章では、イギリス人によってフランケンシュタインと呼ばれる機械じかけの怪物が実際にロンドンの大英博物館にいて、その姿形が獅子に似ているとされている。フランケンシュタインの怪物が大英博物館に眠っているとは、デタラメもいいところだが、又聞きなわけだから、それをあげつらっても仕方があるまい。むしろ興味深いのは、曾紀澤がかつてそれを「睡獅」、あるいは「先睡後醒之巨物」と譯したことがあるという情報が付け加えられていることである。梁のこの文章は、他人の話を紹介する形式になっているが、さきの保國會での演説を考え合わせると、実際には梁啓超自らが創作した話と言って間違いないだろう。

管見の及ぶ限りでは、清末の文章に「睡獅」の二文字が現れるのは、これが最初である。そしてさらに興味深いのは、ここに初めて登場した「睡獅」とは、具體的にはフランケンシュタインの怪物を指しているという事実であろう。前に紹介した『國聞報』の記事と嚴復の按語、およびそれを援用してなされた梁の保國會での演説では、「睡獅」という語はなかったが、今や英人ウルズリ、フランケンシュタインの怪物、曾紀澤の「中國先睡後醒論」の三者が渾然一體となって、フランケンシュタインの怪物Ⅱ獅子の形をした機械じかけの怪物Ⅱ「眠れる獅子」Ⅱ中國の暗喩という圖式が成立したのである。

この圖式は、「自由書 動物談」の直後に書かれた「瓜分危言」では、次のようになる。

それゆえ、「イギリス人は」中國の腐敗せる内情をよく知らぬまま、この巨大な睡獅が何時の日か崛起するであろうと

思っているのだが、あに圖らんや、中國は一再ならず挫折を重ねて今日に至っているわけである。……曾惠敏（曾紀澤）はかつて、イギリス人にむかつて、中國は先睡後醒の巨物だと大言したことがあるが、そのせいでイギリスにはフンケンシュタインに喩える者もいる。⁽¹⁵⁾

つまり、話はさらに敷衍され、A イギリス人は中國を「睡獅」と見なしてその崛起を豫想している、B 曾紀澤はかつて中國を「先睡後醒之巨物」と呼んだ、C イギリス人は中國をフランクンシュタインに喩えている、という言い回しに發展しているのである。このうち、BとCはほぼ事實であるが、Aは梁啓超が初めて言い出したことであつた。詳細は後述するが、これより以前、中國を「睡獅」(Sleeping Lion)と呼ぶ例は、イギリス人を含めて、皆無である。つまり、「睡獅」とは、ウルズリ、フランクンシュタインの怪物、曾紀澤「中國先睡後醒論」の三者に、梁啓超式の想像・連想を加えて出来上がった産物にはかならない、というのが眞實なのである。

梁啓超がこれを言い出して以降、つまり一八九九年以降、「睡獅」および「睡獅」から派生した「醒獅（目覺めたる獅子）」は、清末知識人の愛用語となった。若干の用例を挙げれば、「詩界革命」の先驅者・黃遵憲の「病中紀夢述寄梁任父」（二九〇三年）には、「散作槍炮聲、能無驚睡獅、睡獅果驚起、牙爪將何爲」という句が見える。中國を睡獅になぞらえて、その不振を嘆いているわけだが、實は黃遵憲は梁啓超の舊友であり、この詩もその題が示すように、梁啓超に贈ったものであるから、黃は梁の「睡獅」に詩興を刺激されてこの



圖 1

詩を作ったと考えられよう。

また、「革命軍中馬前卒」の鄒容『革命軍』（一九〇三年）にも「天清地白、霹靂一聲、驚數千年之睡獅而起舞、是在革命、是在獨立」の語が見える。そして、ついに一九〇五年には、その名も『醒獅』（圖1参照）という雑誌が中國人留學生によって東京で創刊されるにいたったように、「睡獅」「醒獅」の流行ぶりは、枚舉にいとまがない。¹⁶それらはひとえに、梁啓超による「睡獅」の發明・創造がもたらした文化現象だと言ってよいだろう。中國Ⅱ「睡獅（眠れる獅子）」という言説は、このように清末にまず中國人世界の中で爆發的に流行したものである。

三 中國國外の「眠れる獅子」言説

前二章の検討によって、中國Ⅱ睡獅説は、梁啓超が戊戌變法時期に聞き知ったウルズリやフランケンシュタインの怪物についての知識を、自らが讀んだことのある曾紀澤「中國先睡後醒論」と想像力を發揮しつつ結びあわせ、一八九九年に創造した言説であることが、ほぼ解明されたと考えるが、讀者諸氏は、なおいくつかの疑念を禁じ得ないであろう。それ以前に中國以外で中國を「眠れる獅子」と呼ぶ例が本當にないのかという疑念、そして曾紀澤「中國先睡後醒論」とフランケンシュタインの怪物イメージは、梁啓超の言説に具體的にどのように関わっているのかという疑念である。そこで、以下ではそれら中國「睡獅」イメージ誕生の構成要素となった事項について、補足的な考證をすることにしよう。

「眠れる中國の覺醒」の出處について、セントヘレナ島に流されていたナポレオンの口から出たものとする説が全くの俗説であって、その根拠を確認することができない¹⁷ということは、すでに紹介したフィッツジェラルド氏が述べる通りである。また、當時の歐米の新聞・雑誌を通覧しても、中國を「睡獅 Sleeping Lion」に擬える用例を見つけることはできない。



圖 2



圖 3

例えば、筆者はそれぞれ英米の新聞を代表する『タイムズ』、『ニューヨーク・タイムズ』を、オンラインデータベース(The Times Digital Archive 1785-1985 など)を利用して検索してみたが、得られた結果は、“sleeping leviathan”, “decaying monster”, “awakening giant” などであって、⁽¹⁸⁾ 国としての中国を獅子に擬える例を見つけることはできなかった。言うまでもなく、国を動物に喩える場合、「獅子」はほとんどの場合は中国ではなくイギリスを表し、中国は「龍」だったからである。⁽¹⁹⁾ 図2、図3は、イギリスの大衆向け漫画雑誌『パンチ』(Punch)に見える例だが、いずれの場合も、中国は邪悪な龍として描かれている。⁽²⁰⁾ 当時、中国が「獅子」に喩えられる素地はなかったと言ってよいだろう。

他方、日本の新聞・雑誌でも状況は同じである。現在、広く用いられている日本の歴史教科書はどれも、日清戦争につ

いて、「それまで『眠れる獅子』と呼ばれ、恐れられてきた清は、新興國日本にあっけなく敗れた。清の弱體ぶりを目の当たりにした列強諸國は、争ってそれぞれの租借地を獲得し、中國進出に足がかりを築いた」と判を押したように記述しているが、日清戦争から戊戌變法にかけての當時の新聞などには、實際には中國を「眠れる獅子」と呼ぶ例はない。それどころか、一八九八年の日本のある新聞社説に見える「眠れる獅子」などは、中國ではなく、東アジアの國際情勢に長らく靜觀的態度をとってきたイギリスを指す語であった。『讀賣新聞』一八九八年一月三日の社説「英國の要求と大連灣の開港 附清國の將來」がそれである。同社説は開口一番、次のように言う。

眠れる獅子は遂に眼を覺せり。多年東洋に於て、沈睡せりと稱せられ、優柔なりと嘲けられ、遲鈍なりと罵られ、露の驕、獨の慢はたまた三國同盟の跋扈を傍觀して毫も聲色を動かさざりし英國は今や猛然として眼を開けり。舊臘以來、英國東洋艦隊の運動俄に活潑となり、その勢いさながら猛獅の廣野を行く如く……殆んど猛獅一嘯百獸震慄の觀あるを見る。

時あたかも日清戦争終結から三年後にして戊戌變法の年、それも中國をめぐる列強の動向を論じたこの論説が、特に英國を指して「眠れる獅子」「猛獅」と呼んでいるということは、當時の日本言論界の常識において、「眠れる獅子」が決して中國を指すものではなかったということを、逆の面から證明するものであろう。もっとも、獅子ではないにせよ、中國は情眠を貪る老大國だと言ひ回しは、當時の日本にも確かにあった。その際、動物をもって形容する場合には、獅子ではなく、象が使われることが多かったようである。これまたいくつか例を挙げてみよう。明治期の中國通ジャーナリスト・岸田吟香が一八八〇年に書いた文章には、中國の改革に言及して「大象の眠を醒し候はば……」という表現が見え、

同様の言い回しは、日清戦争前後に流行したと言われる俗謡「亞細亞の前途（愉快節）」にも「支那は眠れる象なれば……」という一節として確認することができる。⁽²¹⁾ 眠れる中國は、獅子ではなく、象だったのである。

では、日本で中國を指して「眠れる獅子」と言うようになったのは、いったいいつ頃なのか。日本の明治・大正期の新聞については、先にあげた『タイムズ』などのような全文検索のできるデータベースが残念ながらまだ十分に整備されていないので、斷定的なことは言えないが、現時點で確認できる最も早い例は、一九〇五年の『東京日日新聞』のものである。同年一月五日の論説「清國外交の活歴史」は次のように述べる。

清國近世の一大外交家として、上下の尊崇盛名今尙ほ赫々たる曾紀澤氏が、今より十數年前、清國を列強に紹介するに當り、彼の有名なる論策に曰く、清國は眠れる獅子なりと、即ち臥龍の二字より翻譯したる眠獅の二字を以て當時
歐亞外交社會を風靡し……⁽²²⁾

注目すべきは、「眠れる獅子」のその語が、「曾紀澤」の「有名なる論策」に見えるとして紹介されていることである——先にも述べたとおり、実際には曾紀澤の「有名なる論策」、つまり「中國先睡後醒論」をふくめ、曾の文章には「睡獅」という言葉は見あたらないのであるが——。すなわち、『東京日日新聞』の論説のこのくだりは、梁啓超式の「睡獅」の説明を、知ってか知らずか、そのまま援用したものなのである。細かいことを言えば、論説後段の「即ち臥龍の二字より翻譯したる眠獅の二字」という部分は、梁啓超にはなかったもので、流傳の過程で混じり込んだ情報か、あるいは論説子が獨自につけ加えたものか、にわかには判斷できないが、いずれにせよ、「眠れる獅子」の表現が、梁啓超から流れ出ていることは疑いようがない。

梁啓超は、これまでの研究があきらかにしているように、明治日本での滞在を通じて、西洋の近代思想・概念・語彙を日本語經由で中國に紹介した文明傳播の第一人者である。⁽²³⁾それゆえ、梁啓超をとりまく近代思想の流れは、西洋↓明治日本↓梁啓超↓清末中國という経路で説明されることが多いのだが、どうやら「眠れる獅子」に限って言えば、その流通過程は逆のようである。圖示すれば、次のようになるうか。西洋でのフランケンシュタイン怪物言説↓中國での翻譯・解説↓梁啓超の想像的解釋による「睡獅」の誕生↓清末中國での流行↓日本をはじめとする國外への傳播。

つまり、二〇世紀に入ると中國を「眠れる獅子」と呼ぶことが日本でも次第に増えていくが、それはどうやら梁啓超の「睡獅」を受け、清末知識人に愛用されて普及したこの語が、「眠れる獅子」となって日本でも使われるようになったためと考えられるのである。⁽²⁴⁾

四 「フランケンシュタインの怪物」イメージの傳播

第一章で述べたように、梁啓超が一八九八年の保國會での演説で、「イギリス人のウルズリは、『中國はフランケンシュタインの如き怪物であって……』と述べたのは、かれ自身がウルズリの著作や小説『フランケンシュタイン』を讀んだからではなく、『國聞報』の翻譯記事を目にしたからであった。そのさい、『國聞報』の記事と嚴復の按語は、ウルズリの見解とフランケンシュタインの喩えを別個のものとして紹介していたのに、梁啓超は獨斷でその兩者を結びつけた解釋を示したわけだが、當時のフランケンシュタインの怪物のイメージの實際は、どのようなものだったのだろうか。

よく知られているように、メアリ・シェリー（シェリー夫人）の怪奇小説『フランケンシュタイン』は、近代におけるSF小説の先驅と言われ、特に一八三二年にその改訂版が刊行されて以來、造物主に復讐する怪物の寓意として、歐米におい



圖 4



THE IRISH FRANKENSTEIN.

圖 5

て頻繁に引用される有名なキャラクターとなった。當時の西洋での怪物のイメージとしては、圖 4、5 を見てもraithたい。圖 4 は、一八三一年版の『フランケンシュタイン』につけられた挿畫で、圖 5 は一八九二年に前述の『パンチ』に掲載されたものである。圖 5 の怪物は、イギリスに刃向かうアイルランドの獨立運動を戲畫化したものであるが、いずれの場合も、描かれた怪物の姿が、我々の今日思い浮かべるもの——例えば、ハリウッド映畫「フランケンシュタイン」でボリス・カローフ (Boris Karloff) が演じたグロテスクな怪物——とは、相當に異なっていることが確認できよう。

一方、小説そのものの翻譯に話を移すと、そのストーリーの怪異性が災いたためか、『フランケンシュタイン』の東アジアでの紹介は極めて少なかった。日本を例にとって言えば、その小説が初めて翻譯されたのは、一八八九年のことで、瓠廼舎主人なる人物が「新造物者」というタイトルで、雑誌『國乃もとゐ』にかなり忠實な翻譯を發表している。⁵⁵⁾さらに「新造物者」には、フランケンシュタインの怪物を描いた挿畫もつけられていた(圖 6)。もっとも、『國乃もとゐ』の流通範囲はかなり限られたものであったから、この挿畫の怪物イメージが廣まったとは考えられない。イメージ以前に、そ



圖 6

の翻譯自體も未完のままに終わっており、その後、例えばこの作品が映畫化されて大きな話題を呼んだ一九三〇年代にも、小説自體の翻譯は現れず、日本では結局、戦後まで全譯は出版されなかった。

他方、中國においても、ハリウッド映畫「フランケンシュタイン」は、「科學怪人」というタイトルで一九三四年に上海などで上映され、この怪物の名前やイメージを定着させるのに、ある程度の寄與はしたはずだが、小説自體はまったく翻譯された形跡がない。²⁷⁾ 中國大陸において完譯が現れたのは、ようやく一九八〇年代のいわゆる改革・開放時期になってからであった。その意味では、嚴復が一八九八年という時點で、この小説の著者やそこに描かれた怪物の姿をそれなりに的確に伝えていたことは、驚異的であるとさえ言えよう。ひるがえってわれらが梁啓超にしても、かれが嚴復の按語に觸發されて、フランケンシュタインを獅子

に似た機械じかけの怪物だと想像したとしても、それを嚙うことは誰にもできないはずである。

このように、一九世紀末の東アジアにおいて、フランケンシュタインの怪物のイメージをその寓意と共に正確に捉えることは至難のことであった。だが、「黃禍論」の盛行する西洋諸國にあつては、フランケンシュタインの怪物をもって中國に擬えることは、先の『國聞報』の翻譯記事にも見えるように、かなり一般的に行われていたようである。以下に、出典を確認できる例をもうひとつ挙げておこう。まさに戊戌の年（一八九八年）の『タイムズ』の記事（九月一四日）である。

しかし、中國の發展に關連しては、別の面もある。すなわち、かの國の發展を促進することによって、我々は恐らく

フランケンシュタインを立ち上がらせることになるかも知れないことである。中國は世界の大きいなる工場になるかも知れないのであって、我々は中國に取って代わられてしまっただろう。つまり、我々がかれらに供給するのではなく、かれらが我々に供給するようになってしまっただろうということである。⁽²⁸⁾

中國の改革・發展を促すことが、西洋にとって災いとなつてはね返ってくることを懸念しているわけである。この文章から一世紀を経て、今や中國が「世界の工場」となり、シャツから玩具にいたるまで、メイド・イン・チャイナが世界を席巻している状況を知る我々としては、この文章を感慨なしに讀むことはできない。文章中の「フランケンシュタイン」をかりに「眠れる獅子」と置き換えても、その寓意はまったく變わらないわけだから、梁啓超流の讀み替えは、それなりに事の本質をとらえた「妙譯」だと言うことも、可能かも知れない。補足しておけば、現在でも歐米では、中國をフランケンシュタインの怪物になぞらえる言い方はなお健在で、概して言えば、眠れる獅子 (Sleeping Lion) と呼ぶことは、中國や日本ほど一般的ではない。

中國をフランケンシュタインの怪物に擬える論者が歐米に多いことは、梁啓超よりやや後のことではあるが、滯米中の孫文が一九〇四年に執筆した英文パンフレット「中國問題の眞の解決」(*The True Solution of the Chinese Question*)でも言及されている。孫文の意圖は、中國をフランケンシュタインの怪物と見なしてその覺醒を恐れる歐米世論を、「黃禍論」に毒された偏見として退け、中國の變革は世界の平和と繁榮に寄與すると訴えることにあった。このパンフレットは、孫文が進めようとしている革命運動の理念をわかりやすく伝えるものであったため、その後中國人向けに翻譯が行われた。ただし、ここでも扱いが難しいのは、フランケンシュタインのくだりをどう譯すかである。一九〇六年に日本で刊行されたそのパンフレット(中英對譯版で、タイトルは『支那問題眞解』⁽²⁹⁾)では、フランケンシュタインは「法蘭坎士泰」と音譯され、「自殘

同類之動物」（自ら同類を残なう動物）という割注が付けられている。當時としては、これが精一杯だったのであろう。

ちなみにこのパンフレットは、孫文が偉大な革命家として尊崇されるようになって以後、つまり南京國民政府時期、人民共和國時期には、孫文の文集に翻譯し直した中國語版が收録されるようになったが、興味深いことに、それらの新譯はすべて Frankenstein を譯出せず、大膽な意譯をしている。中には、何と「睡獅」の語を使って意譯しているものもある。^⑧前に述べたように、小説『フランケンシュタイン』の中國語譯は一九八〇年代までなかったわけだから、フランケンシュタインをイメージできない中國人讀者にその含意を伝えるには、「睡獅」を使った方が手取り早いのである。その意味では、「睡獅」とフランケンシュタインの怪物とは、そのイメージの近似性ゆえに、同義語であったということさえ可能であろう。

五 曾紀澤「中國先睡後醒論」の廣がり

前述のように、梁啓超は「自由書 動物談」において、フランケンシュタインの怪物を「睡獅」、あるいは「先睡後醒の巨物」と表現したのは曾紀澤であると述べていた。梁啓超が曾の「中國先睡後醒論」を受けて、「先睡後醒の巨物」と解釋したのは理解できるとしても、「睡獅」の方は一體どのような脈絡で導き出されたのであろうか。曾紀澤の文集には、その「中國先睡後醒論」も含め、「睡獅」という語は全く見えないとなれば、なおさら疑問は深い。まずは、「中國先睡後醒論」の傳播から検討してみよう。

當初、英文で『アジアティック・クォーターリー・レビュー』に發表された「中國先睡後醒論」は、その後ほとんど香港の英字新聞『チャイナ・メール』—— *The China Mail* 中國語表記は『德臣報』——（一八八七年二月八日）などに轉載され、

さらに後に顔詠經、袁竹一らによって漢譯が發表された（『新政眞詮初編』一九〇一年、『皇朝蓄艾文編』一九〇三年）と言われている。⁽³²⁾ 中國語版の「中國先睡後醒論」は、一八九三年に刊行された『曾惠敏公遺集』などには收められていないのに、梁啓超はどのようにしてこの文章を知り得たのだろうか。曾紀澤に關するこれまでの研究は、漢譯版の「中國先睡後醒論」が知られるようになるのは、『新政眞詮初編』などに收められてのちのこと、つまり二〇世紀になって以降だとするが、實際には、漢譯はそれ以前に上海の『申報』（一八八七年六月）などに掲載されている。⁽³⁴⁾ 曾紀澤も、英文で發表したこの文章をかなり氣に入っていたらしく、一八八六年十一月の歸國後まもなく、中國の人士にも讀ませるために、翻譯を命じていた。かれは一八八七年四月に、マカートニー（Halliday Macartney）に宛てた英文の書簡で次のように述べている。

『アジアティック・クォーターリー』の文章が話題になっていることを知りました。もちろん、その最新の状況についてはわかりませんが。わたしは、内輪の人が回覽できるように、同文館の英語のできる學生の一人にそれを中國語に翻譯させました。それがうまく行くよう願っています。⁽³⁵⁾

當初、内輪の回覽のためになされたこの漢譯がのちに何らかの経緯で『申報』に轉載されたのか、それとも『申報』側が獨自に翻譯を發表したのか、そのあたりは判然としないが、いずれにせよ、梁啓超が戊戌以前に漢譯の「中國先睡後醒論」を讀むことが可能であったことは間違いない。付言すれば、曾紀澤に「中國先睡後醒論」の著作があり、かなりの反響を引き起こしたことは、日清戦争當時の日本でも知られており、尾崎行雄などが紹介している。⁽³⁶⁾

さて、曾紀澤の文集には、この「中國先睡後醒論」も含め、「睡獅」という語は全く見えないのに、梁啓超はなぜフランケンシュタインの怪物から「獅子」を連想したのであろうか。實は、曾紀澤は「睡獅」という語こそ用いなかったが、國

を喩える場合の動物として獅子に言及したことはあった。『曾惠敏公遺集』に収める「爲潘伯寅大司空畫獅子紈扇率題一首」に言う。

イギリス國は泰西に雄を稱し、軍旗や宮廷の紋章には、いずれも獅子と一角獸とが飾りに描かれている。これは、ちょうどロシアが北極熊、フランスやゲルマンが猛禽を描くように、それぞれの象徴である。⁽³⁷⁾

つまり、かれは獅子がイギリスの象徴であること（同様に白熊、猛禽がそれぞれロシア、佛獨の象徴であること）を書き記しているのである。また、別の詩の「引」でも、「獅子」が「毛群の特」（百獸の王）であり、日頃はゴロゴロしているが、狩りにさいして一變して獐猛になることを記している。⁽³⁸⁾ これら曾紀澤の詩文を目にすれば、獅子についてのある種のイメージが喚起されるということは、考えられなくもない。⁽³⁹⁾ ただし、梁啓超が曾紀澤のこれらの詩を知っていたか否かはまったく不明であり、たとえ讀んだことがあったとしても、それがきっかけになって、機械じかけのロボットのごときフランケンシュタインの怪物が「睡獅」なるイメージへと變貌していくには、相當な想像力の飛躍がなければ難しいであろう。

一方、中國の傳統的な獅子イメージ、特に清末にふたたび中國知識人をとらえた佛教における獅子イメージ（護教者のシンボル）などが、梁啓超の「睡獅」イメージに何らかの觸媒となった可能性もないとは言えない。⁽⁴⁰⁾ ただし、これも曾紀澤の「獅子」と同様に、あくまでもその可能性があるに止まるのであって、諸々の古典を通觀しても、直接に梁啓超の「睡獅」につながるような典故が見いだせない以上、確定的なことはどうも言えそうにない。⁽⁴¹⁾

おわりに——「睡獅」「醒獅」イメージのその後

ナショナリズム勃興や救亡意識高揚といった時代の中で、あるキャッチフレーズやイメージがそれら時代精神を凝縮する上で、結晶化の核の役割を果たすことがある。對外的な危機意識に包まれた清末・民國時期においては、國際社會における中國の屈辱的國勢を巧みに表現し、愛國的情熱を掻きたてる言説・イメージがしばしば發明された。「東亞の病夫」⁽⁴²⁾しかり、租界公園の高札にあったとされる「犬と中國人は入るべからず（華人與狗不得入内）」の語しかり、「バラバラの砂（盤散沙）」言説⁽⁴³⁾またしかり、である。梁啓超の發想にかかる「眠れる獅子」もその系譜に連なる發明品のひとつであり、この言葉、あるいはそこから派生したイメージが、近現代中國のナショナリズムにたいして果たした役割は、改めて言うまでもないほど大きい。梁啓超は、自らの言論活動が清末に呼び起こした影響力を、その新文體と重ね合わせて、「筆鋒はつねに情感にあふれて、讀者にとつて、一種ふしぎな魅力をそなえていた」と評したが、「睡獅」説のその後の流行ぶりを考え合わせるならば、かれの言論の魅力は、想像力をかきたてる巧みなキャッチフレーズ創造にまで及んでいたと言える。 「睡獅」「醒獅」説は、その語の登場から數年後に『醒獅』なる雑誌が發刊されたように、ある意味では梁啓超の當初の思惑を越えるほどのインパクトを中國知識界に引き起こしたわけだが、この語の持った正負の意味については、中國人のナショナリスト的自負心を批判的に觀察した後年の知識人から、次のような指摘がなされるに到る。一九三三年に魯迅が發表した「黃禍」の一節である。

今日、「黃禍」といえば、我々自身は黃河の堤防決潰を指しているが、三十年前は決してそうではなかった。あの頃は、黃色人種がまさにヨーロッパを席捲しようとしているという意味にとり、一部の英雄はこの言葉を耳にすると、白人

から「眠れる獅子」とお追従を言われたように思い、何年にもわたって得意になり、ヨーロッパの主人になる準備をしていたものである。⁽⁴⁴⁾

これは、清末中國における「黃禍」理解の側面を伝える當事者の言として興味ぶかいが、「睡獅」がそうしたうぬぼれた「黃禍」理解に重ね合わされているように、魯迅にとって清末以來の「睡獅」のイメージは、中國人の自尊心を満足させてくれる「お追従」（恭維話）の一形態なのであり、そうした自己満足の様態をかれは批判的に紹介しているということになる。⁽⁴⁵⁾

むろん、こうした自尊心をくすぐる「睡獅」イメージは、半ば梁啓超の迷惑をこえて擴大したものであるから、その責任をすべて發明者の梁啓超に負わせることはできないであろう。また、魯迅にしても、この言葉が梁啓超の創作にかかるということを知っていたとは思えない。さらには、このエッセイが書かれた時には、梁はすでにこの世の人ではなかったから、かれが魯迅のこの皮肉に反論することはできなかった。ただし、中國ナショナリズムが「醒獅」そのものの姿をとって立ち現れた時、晩年の梁啓超は圖らずも、自らがかつて創造したイメージそのものに對面されたようである。

「獅子」を掲げる中國ナショナリズムと言えば、一九二〇年代半ばに曾琦らによって組織された中國青年黨（中國國家主義青年團、國家主義派）が「醒獅運動」を掲げ、『醒獅週報』を自派の刊行物としたことがすぐに想起されるが、梁啓超は曾らの働きかけを受ける中で、「獅子像」に對面させられたことがあったらしい。梁啓超を黨首に擔ぐべく接近を圖った曾琦らの動きを回想した周傳儒（梁啓超の弟子のひとり）は、次のように述べている。

民國一四、五年（一九二五、二六年）のころ、國家主義派の曾琦は北京の梁啓超を訪れたことがあった。（國民黨、共產黨

以外の)第三の黨をつくるべく、梁と章太炎(章炳麟)を南北の首領に擔ごうというのである。かなり話し合ったものの、梁は結局同意しなかった。……(同意はしなかったものの、梁啓超がその後、曾に三千元の活動費を贈ると)……曾琦はお禮として人の半身ほどもある銅製の獅子を梁啓超に贈った。銅の獅子は醒獅派の黨のシンボルにはかならない。わたしは梁家に行ったおりに、机に銅獅子が置いてあるのを見て尋ねたところ、曾琦が贈ったものだと言われたのであった。⁴⁶⁾

梁啓超は「醒獅派」の黨派運動にはくみしなかったものの、実際にはかれらを「最有朝氣、最能奮闘」と評價して、ある程度の期待をかけていたようである。⁴⁷⁾ただ、曾琦らが銅の獅子像を贈った時、曾はその目覺めたる獅子のイメージを中國で最初に喚起したのが、他でもない梁啓超自身であったことに氣づいてはいなかったと思われる。なぜなら、かれらの機關誌『醒獅週報』の發刊宣言(一九二四年一〇月)は、「睡獅」「醒獅」説の由來について、次のように曾紀澤に淵源すると述べていたからである。

その昔、曾紀澤はヨーロッパに赴任したさい、西洋が東洋を侵そうとする勢いを見て、「睡獅」の説を用いてかの人々にこう告げている。中國は地大にして人多く、アジアに巍然と獨立せり、その姿は雄獅のごとく、今はただ睡して未だ醒めざるのみ、と。……ああ、我が國民は本當に劣等で救いようがないのであろうか。それとも、曾氏の言うが如く、睡して未だ醒めざる雄獅なのであろうか。⁴⁸⁾

すでに本稿で縷々説明したように、曾紀澤の「中國先睡後醒論」などには「睡獅」の語は見えないのだが、かれら「醒獅派」は、ちょうど二十年以上も前に梁啓超が解釋した如くに、曾紀澤と「睡獅」説を結びつけていたのである。「醒獅」

の語を掲げる政治グループすらこのように考えていたわけだから、これが一九二〇年代における平均的な「睡獅」説の歴史的淵源についての理解であつただろう。⁽⁴⁹⁾

醒獅派からの働きかけを受け、またその活動に期待を寄せていた梁啓超であるから、當然にかれが『醒獅週報』のこの發刊宣言を読んでいた可能性は高い。さらにはかれら醒獅派から、銅製の獅子像まで贈られていたのだから、かれは若き日に自らが案出した「睡獅」イメージの來歴について、何らかの思いを致した可能性はある。假に、この時の梁啓超が「醒獅有感」というような文章を書いてくれば、中國における「睡獅」イメージ發生の顛末が、當事者の口から明かされることになっただろうが、それに類する文章は残念ながら残ってはいない。かくて、來歴の明かされぬまま、「睡獅」「醒獅」イメージは、その後も擴大・定着し続け、今日に至っているのである。

注

- (1) 丁文江・趙豐田編、島田虔次編譯『梁啓超年譜長編』全五卷、岩波書店、二〇〇四年。
- (2) 上海人民出版社版、一一一頁。引用にあたっては、『國聞報』第二〇九號（一八九八年五月三二日）、『知新報』第五五冊（一八九八年六月九日）の掲載文によって、若干の字句を補正した。
- (3) 『梁啓超年譜長編』（日本語版）第一卷、三七九～三八〇頁。なお、「フランケンシュタイン」というのは怪物を作った青年の名前であつて、小説では怪物自體には名前はつけられていない。したがって、怪物の名を「フランケンシュタイン」と表記したこの譯文と譯注は不正確で、訂正せねばならない。
- (4) この文章のあることは、譯注作成の中で、同じく譯者グループの一人である井波陵一氏に教示してもらつた。
- (5) John Fitzgerald, *Awakening China: Politics, Culture, and Class in the Nationalist Revolution*, Stanford: Stanford University Press, 1996（漢譯：李恭忠等譯『喚醒中國——國民革命中的政治、文化與階級』生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇四年）、單正平『近代思想文化語境中的醒獅形象』『南開學報（哲學社會科學版）』二〇〇六年第四期（單正平『晚清民族主義與文學轉型』人民出版社、二〇〇六年に收録）、楊瑞松『睡獅將醒？：近代中國國族共同體論述中的「睡」與「獅」意象』『國立政治大學歷史學報』第三〇期、二〇〇八年。
- (6) 費約翰（Fitzgerald）『中文版序』（前掲『喚醒中國——國民革命中的政治、文化與階級』二一～三頁）。
- (7) 前掲單正平『晚清民族主義與文學轉型』一三〇頁。ちなみに、單氏は中國の覺醒に關するナポレオンの箴言の眞偽については、フィッツジェラルド氏の説をなお不十分として、ナポレオンが言つた可能性が

あると述べている。

- (8) 『清議報』第二三號、一八九九年四月（今『飲冰室合集・專集』二に收める）。

- (9) 梁啓超「三十自述」（一九〇二年）『飲冰室合集・文集』一一、一六頁。

- (10) 『國聞報』（天津）一八九八年三月三日。嚴復の按語部分は、王栻主編『嚴復集』第一冊（中華書局、一九八六年、七八頁）に收録されている。なお、この漢譯記事のものと文章が掲載されたという『國運報』のオリジナル誌名（すなわち英文誌名）は、残念ながら未詳である。

- (11) 原文は以下の通り。「我英現任陸師大元帥某君、曾於數年前論中國事謂、中國民衆四百兆、假天生拿破崙於其中、奮其才勇以爲之君、振長策以鞭笞宇內、數年之後、歐洲之人將絕跡於亞東而太西種族將爲所偏處。（所謂現任大元帥者、蓋烏理西子爵、其平居論中國之大可用）」

「中國既勝之後、則將爲佛蘭金仙之怪物、斯怪物任其臥則安寢無爲、警之覺則大奮爪牙、起爲人害。（佛蘭金仙怪物者、傀儡也、見於英閨秀諸理之小說、傳膠鞮革挺筋骨以爲人、機關振觸則跳躍殺人、莫之敢當、惟縱其酣臥乃無事、論者以此方中國、蓋亦謂吾內力甚大、歐之人所以能稱雄宇內者、特以吾之尚睡未醒故耳）」

- (12) ウルズリは、ナポレオンのごとき人物が現れさえすれば、中國は西洋諸國を凌駕する強國になり得るということをしばしば述べていた。例えば、ウルズリの自傳（Wolsley, *The Story of a Soldier's Life*, Westminster: Archibald Constable & Co. Ltd, 1903）p.「人口數の面では、中國はどすこい國はない。かれらの習慣や生活様式はその巨大な帝國の隅々までは共通である。私の見るところでは、中國人はこの世で最も優れた人種であり、世界の來るべき偉大な支配者となるであろう。私はこれまで一貫してそう考えてきたし、今でもそう思っている。中國には、ピョートル大帝やナポレオンのごとき人物がいらないだけなのである」と述べている（vol. 2, p. 2）。また、ウルズリの

そうした見解は、西洋の雜誌記事を翻譯する形で、中國國內でも紹介されていた（中國實情『時務報』第一〇冊、一八九六年（上海の『字林西報 North China Daily News』一八九六年一月一七日よりの翻譯）、および「論東方之害」『外交報』第二七期、一九〇五年『康頓白烈報 Contemporary Review』一九〇五年五月）よりの翻譯。

- (13) 原文は以下の通り。「梁啓超隱几而臥、隣室有甲乙丙丁四人者、咄咄爲動物談……丁曰、吾昔游倫敦、倫敦博物院有人製之怪物焉、狀若獅子、然偃臥無生動氣。或語余曰、子無輕視此物、其內有機焉、一撥振之、則張牙舞爪、以搏以噬、千人之力、未之敵也。余詢其名、其人曰、英語謂之佛蘭金仙、昔支那公使曾侯紀澤譯其名謂之睡獅、又謂之先睡後醒之巨物。余試撥其機、則動力未發而機忽坼、整吾手焉。蓋其機廢置已久、既就鏽蝕、而又有他物梗之者、非更易新機、則此佛蘭金仙者、將長睡不醒矣、惜哉。」

- (14) ちなみに、丁以外の人物の語る動物談とは、巨鯨、盲魚、群羊であり、いずれも衰亡せんとする中國の運命に重ね合わされている。

- (15) 「瓜分危言」『飲冰室合集・文集』四、二一、四二頁。原文は以下の通り。「其故、皆坐未深知中國腐敗之內情、以爲此龐大之睡獅終有蹶起之一日也、而不知其一挫再挫、以至於今日。……曾惠敏曾對英人大言曰、中國先睡後醒之巨物也、故英人亦有佛蘭金仙之喻。」

- (16) 梁啓超らの『新民叢報』も、一九〇三年二月の第二五號より雜誌表紙の圖柄を躍動する獅子に變え、表紙裏に蔣觀雲（智由）の「醒獅歌」を掲げている。清末の「睡獅」「醒獅」の用例については、前掲覃正平『晚清民族主義與文學轉型』第四章、前掲楊瑞松「睡獅將醒?…近代中國國族共同體論述中的「睡」與「獅」意象」が網羅的に紹介している。費約翰（Fitzgerald）「中文版序」（前掲『喚醒中國——國民革命中的政治、文化與階級』一—三頁）。なお、この言葉が眞にナポレオンに由來するかどうかとは別に、ナポレオンがそう言ったという説は、すでに一九世紀末の時點で西洋人には、一般に受け入れられていたようにで

- あ。 John L. Stoddard, *China*, Chicago: Belford, Middlebrook, 1897, pp. 111-112. (漢譯: 約翰・斯塔德著、李濤譯『一八九七年的中國』山東畫報出版社、二〇〇四年、九七頁) 参照。
- (18) “Planning to Save Peking / Brilliant Schemes of Defensive Warfare Proposed by Chinese”, *New York Times*, Feb. 11, 1895; J. O. P. Bland, *Recent Events and Present Policies in China*, Philadelphia: J. B. Lippincott, London: William Heinemann, 1912, p. 413. なおヨーロッパにおける中國イメージについては、東田雅博『圖像のなかの中國と日本——ヴィクトリア朝のオリエンタ幻想』(山川出版社、一九九八年)が豊富な圖像・戯畫を紹介しながら分析している。本稿で使用する圖2、3、5は、東田氏の著書(それぞれ、九〇、九三、二〇九頁)に見えるものである。
- (19) その一例を Arthur Dicosy, *The New Far East*, 4th ed., London: Cassell, 1904, p. 333-334.
- (20) 圖2(右上の龍は中國を表し、銃を持つ手前の獅子と猛禽はそれぞれイギリスとフランスを表す)、3(イギリスを表す聖戰士が中國を表す龍に槍を向けている)はそれぞれ一八五九年(第二次アヘン戦争)、一九〇〇年(義和團事件)當時の『パンチ』に見えるものである。
- (21) 『吟香翁書牘ノ續』(『朝野新聞』一八八〇年五月三日)、亞細亞の前途(愉快節)、『添田啞蟬坊・知道著作集』4 演歌の明治大正史、刀水書房、一九八二年、五四〜五五頁)参照。前者の記事の存在については、武上眞理子氏の教示を受けた。なお、『東京日日新聞』(一九〇六年二月二日)の社説「歐米と清國」にも「支那は眠れる一大象なり」という言葉が、曾紀澤の言として紹介されている。もっとも、この論説は後に『外交報』(第一三八期、一九〇六年四月)に「論歐美之對待中國」というタイトルで漢譯されたが、その際はこの「眠れる一大象」の語が「睡獅」と譯されている。この時点での中國での「睡獅」の定着がその背景にあろう。
- (22) なお、この論説は後に中國の雑誌『外交報』に翻譯掲載されたという(前掲楊瑞松「睡獅將醒?…近代中國國族共同體論述中的「睡」與「獅」意象」が、具體的には同誌第一三〇期(一九〇五年二月)の「論中國外交本原」がそれである。楊氏はこれら日本の新聞に見える「眠れる獅子」の用法が、梁啓超から流れ出たものではないかと推測しているが、正鵠を得た指摘であろう。
- (23) この方面に關する研究としては、いうまでもなく、狹間直樹編『共同研究 梁啓超——西洋近代思想受容と明治日本』(みすず書房、一九九九年)が参照されるべきであろう。
- (24) 日本では、中國通にして中國に關する多くの著作で知られる後藤朝太郎の『支那縱談…眠れる獅子』(萬里閣書房、一九二九年)あたりが「睡獅」言説の普及に與つていよう。また、戦後も、衛藤瀋吉による中國近代史の通史が『眠れる獅子』(大世界史第二〇卷、文藝春秋、一九六九年)というタイトルで刊行されているが、衛藤氏によれば、この書名は衛藤氏が決めたのではなく、出版社側が提案したものであるという(『衛藤瀋吉著作集』第四卷、東方書店、二〇〇三年、三三四頁)。
- (25) 狐廬舎主人稿「新造物者」『國乃もとゐ』第三、二號(末元)、一八八九〜一八九〇年。近年、小説『フランケンシュタイン』をめぐっては、ジェンダー論、身體論など多方面からの解釋が示されているが、日本での翻譯事情については、ほとんど關心が拂われていないのが實情である。その意味では、日本での翻譯事情を明らかにした横田順彌「明治時代は謎だらけ!『フランケンシュタイン』の初譯について」(『日本古書通信』六一卷三號、一九九六年)は、貴重な論考である。付言すれば、雑誌『國乃もとゐ』の翻譯が梁啓超に何らかの影響を与えた可能性は、同雑誌の流通が限られたものであったことを考えても、絶無である。
- (26) 「准演外國影片」覽『中國電影年鑑 一九三四年』中國教育電影協會、一九三四年、九八頁。

- (27) 中國における外國文學研究でも、小説『フランケンシュタイン』に關するものは、決して少なくはないが、同小説の中國における傳播やその影響について述べたものは、皆無である。今後の研究の進展が待たれる。
- (28) “British Association”, *The Times*, Sep. 14, 1898.
- (29) 『支那問題眞解』（孫逸仙演說、公民〔國民〕俱樂部譯述・發行、黃帝紀元四三九六年臘月十日〔一九〇六年一月四日〕出版——神戸大學圖書館藏）。このパンフレットについては、石川禎浩「山口一郎記念賞を受賞して（附 神戸大學所藏の孫文の革命パンフレット）」『孫文研究』四四號、二〇〇八年）参照。
- (30) 原文が「they would thereby create a sort of Frankenstein」の部分には、胡漢民編『總理全集』（第一集、民智書局、一九三〇年、九三四頁）では「若一任其採行西法、警覺睡獅、勢必凌厲無前」となっており、『孫中山選集』（上巻、人民出版社、一九五六年、六一頁）では、「中國……就會是對全世界的一個威脅」と譯されている。
- (31) 顏詠經は顏永京（一八三八—一八九八、顏惠慶の父、當時聖約翰學院學監）のことであろう。袁竹一は、原名袁康、かつて『萬國公報』の編輯（各國消息の翻譯）をつとめたことがある（楊代春『萬國公報』與晚清中西文化交流、湖南人民出版社、二〇〇二年、三三、六八頁）。李恩涵『曾紀澤的外交』中央研究院近代史研究所、一九六六年、二七六頁、張立眞『曾紀澤本傳』遼寧古籍出版社、一九九七年、二二〇—二二二頁。なお、單正平氏は『德臣報』に掲載されたものを中國語版だと考え、それを梁啓超が讀んでいたという前提で議論を進めている（前掲『晚清民族主義與文學轉型』一二四—一二五、二二九頁）——梁啓超が「中國先睡後醒論」に言及したのは『新政眞詮初編』や『皇朝蓄文文編』の刊行以前でなければならぬから——が、誤解である。
- (32) 前掲張立眞『曾紀澤本傳』二二〇—二二二頁。
- (33) 顏詠經口譯、袁竹一筆述「中國先睡後醒論」『申報』一八八七年六月一
- (34) 四、一五日。後に『新政眞詮初編』などに收められたのは、この漢譯版であろう。なお、『申報』にこの文章があることについては、箱田恵子氏の教示を得た。
- (35) 「曾紀澤のマカートニーあて書簡（一八八七年四月二六日）」（Demetrius C. Boulger, *The Life of Sir Halliday Macartney K. C. M. G.*, London: J. Lane, the Bodley Head, 1908, p. 435）。マカートニーは、中國の駐英公使館參贊をつとめ、「中國先睡後醒論」の執筆、發表にも協力した人物である。
- (36) 尾崎行雄『支那處分案』（博文館、一八九五年、一六頁）には、「先きに佛清の間に事あるや、清使曾紀澤は言して曰く「支那は睡れり、爾後蹶起すべし」と。爾後既に十星霜を閱すと雖も、支那は尙ほ依然として華胥郷裡に在り」とある。
- (37) 『曾紀澤遺集』嶽麓書社、一九八三年、三一五—三一六頁。原文は以下の通り。「英吉利國稱雄泰西、軍國大勳及宮廷印章、皆雕繪獅子與一角馬爲飾、殆與俄羅斯畫北極之熊、佛朗西、日耳曼畫鷹隼者、各有取義」同前。
- (38) 前掲單正平『晚清民族主義與文學轉型』二二六—二二七頁。
- (39) 前掲單正平『晚清民族主義與文學轉型』二二六—二二七頁。中國古代における獅子イメージについては、蔡鴻生『獅在華夏——一個跨文化現象的歷史考察』（王賓、比松主編『獅在華夏——文化雙向認識的戰略問題』中山大學出版社、一九九三年）、同『西域獅子の華化形態』（鄭培凱主編『西域——中外文明交流的中轉站』香港城市大學出版社、二〇〇九年）が詳しく述べており、参考になるが、残念ながら、清末の獅子については、ほとんど言及するところがない。
- (40) 清代の詩文で「醒獅」に言及するものには、傅占衡（清中期の人）「述夢」（『湘帆堂集』）、夏敬渠『野叟曝言』（光緒八年）などがある。こうした中國在來の獅子イメージ（あるいは民間傳統行事——例えば獅子舞——に登場する獅子）が、梁啓超の「睡獅」「醒獅」の發明に間
- (41) 前掲張立眞『曾紀澤本傳』二二〇—二二二頁。
- (42) 顏詠經口譯、袁竹一筆述「中國先睡後醒論」『申報』一八八七年六月一

接的に影響を及ぼしたという可能性はあろう。

(42)

これらの言説についての歴史學的分析については、楊瑞松「想像民族恥辱…近代中國思想文化史上の『東亞病夫』」（『國立政治大學歷史學報』二三期、二〇〇五年）、石川禎浩「犬と中國人は入るべからず」問題再考」（伊藤之雄、川田稔編『環太平洋の國際秩序の模索と日本——第一次世界大戰後から五五年體制成立』山川出版社、一九九九年）、藤井隆「一盤散沙」の由來——廣學會と戊戌變法運動」（『現代中國』八二號、二〇〇八年）参照。

(43)

梁啓超「清代學術概論」『飲冰室合集・專集』三四、六二頁（邦譯・小野和子譯注『清代學術概論——中國のルネッサンス』平凡社、一九七四年、二七二頁）。

(44)

『魯迅全集』第五集、人民文學出版社、一九八一年、三四三～三四四頁。原文は以下の通り。「現在的所謂「黃禍」、我們自己是在指黃河決口了、但三十年之前、並不如如此。那時是解作黃色人種將要席捲歐洲的意思的、有些英雄聽到了這句話、恰如聽得被白人恭維爲「睡獅」一樣、得意了

好幾年、準備着去做歐洲的主子。」

(45)

魯迅と同様の見解は、朱執信によっても表明されている。「睡的人醒了」（『民國日報』副刊「覺悟」一九一九年六月二八日～七月三日）。

(46)

周傳儒「回憶梁啓超先生」（夏曉虹編『追憶梁啓超』中國廣播電視出版社、一九九七年、三七五～三七六頁）。

(47)

「梁啓超の子どもたちへの書簡（一九二七年一月一八、二五旦）」（梁啓超年譜長編）上海人民出版社、一九八三年、一一二頁、日本語版第五卷、一九七頁）。

(48)

『「醒獅」週報出版宣言』『睡獅週報』第一期、一九二四年一〇月一〇日。付言すると、『醒獅』週報出版宣言」は、睡獅の由來について、ナポレオンには全く言及していない。睡獅の説（あるいは眠れる中國の覺醒が世界を揺るがすという言説）がナポレオンに出るという理解は、西洋人はともかく（本稿注17参照）、中國人の間では、かなり遅れて見られるようである。

(49)

「醒獅」週報出版宣言』『睡獅週報』第一期、一九二四年一〇月一〇日。付言すると、『醒獅』週報出版宣言」は、睡獅の由來について、ナポレオンには全く言及していない。睡獅の説（あるいは眠れる中國の覺醒が世界を揺るがすという言説）がナポレオンに出るという理解は、西洋人はともかく（本稿注17参照）、中國人の間では、かなり遅れて見られるようである。